

北欧選手権報告

村越 真

「熾烈なクロス（カントリー）」、北欧選手権は昔からこう呼ばれていた。オリエンテーリング発祥の地である北欧で、各国6名の選手が選手権を競う。その意味では世界選手権以上に上位に入るのが難しいレースである。しかも、最近では北欧選手権はオープンになり、北欧以外にもスイスやイギリスなどトップ諸国が参加してくる。長い間、一種の憧れであった北欧選手権に、今回は初めて参加する機会を得た。

今回はフィンランドのミッケリというヘルシンキの北東250kmの町で開催された。偶然にも世界選手権と同じ国での開催となった。これが、僕たちが参加できた大きな理由である。6月8日にクラシック、9日にはショート、10日にはリレーである。「熾烈なクロス」の名に恥じない厳しい日程である。

日本からの参加は、新潟の小林・岩谷夫妻、加納尚子、落合志保子、そして僕の5人。小林氏は、大会中はオフィシャルとして僕たち選手の世話をしてくれた。世界選手権開催地であるタンペレで3日ほどトレーニングをした後、ミッケリに向かった。ミッケリでの宿舎は、レジャー関係の専門学校のような。夏の間空になるこうした学校の寄宿舎が、オリエンテーリングでは好む宿舎になっている。

テレインは全体に山がちで、タフだと言われていたが、登りの多い日本のレースで走っている身にとっては、そのこと自体驚きでも脅威でもなかった。また植生もタンペレほど悪くなく、さらに可能性を下げる倒木や落枝さえない。久しぶりの100分レースであるという点を除けば、むしろ楽しいくらいのレースだった。

8日のクラシックは、スコットランドの世界選手権で史上最年少の世界チャンピオンになったヨルゲン・ロストロップ（ノルウェー）女子は日本でもおなじ

みの同じくノルウェーのハンネ・スタッフであった。また男子のジュニアでもノルウェーが優勝し、ノルウェーにとっては最高の日となった。反対にスウェーデンは女子ジュニアで優勝したが、男子シニアではボロボロだった。その日の夕方、彼らの部屋の前を通りがかると、「前進とは・・・の問題ではなく、・・・の問題だ」というビョルナー・バルシュタットの言葉が張り出されていた。その言葉の意味を本人に尋ねると、「そりゃあ、僕の言葉にしては意味深すぎるな。多分、合宿の時呼ばれてレクチャーした時の言葉じゃないかな」という答えだった。

翌9日は、レース直後に会場を後にして帰国したので、結果だけ載せておこう。38分で内容的には悪くない感じでゴールして、「これはトップも30分切るのがやっとな」と思ったが、実際にはトップが27分台。38分じゃあ、ほとんどビリに近かった。クラシック、ショートとも北欧勢が中心でなかなか上位になれないことに加えて、世界選手権には来る国々が来ないので、ちょっとでも気を許すとほとんど最下位である。落合、岩谷、加納も苦戦の様子であった。

男子クラシック

1. Rostrup Jorgen NOR 1.27.42
2. Valstad Bjornar NOR 1.28.44
3. Salmi Janne FIN 1.29.03
74. Murakoshi Shin JPN 1.49.07

女子クラシック

1. Staff Hanne NOR 1.04.48
2. Luder Simone SUI 1.05.02
3. Asklof Johanna FIN 1.05.45
93. Ochiai Shihoko JPN 1.56.53
97. Iwaya Hiromi JPN 2.22.23
98. Kano Naoko JPN 2.23.57

男子ショート

1. Rostrup Jorgen NOR 26.48
2. Mameev Michail RUS 26.53
3. Novikov Valentin RUS 27.06
110. Murakoshi Shin JPN 38.21

女子ショート

1. Granstedt Anette SWE 20.32
2. Konig-Salmi Vroni SUI 21.09
3. Johansson Jenny SWE 21.25
93. Ochiai Shihoko JPN 34.48
96. Iwaya Hiromi JPN 42.56

